



央州寺通信 六月号



菅原祐軌 ysobtportland06012017@oregonbuddhisttemple.com

「本願寺派における安居と学階」

先日、日本に一週間ほど戻ってきました。三つほど帰国の理由があったのですが、一つは父に会うこと、二つ目は免許の更新（アメリカに住んでいるのに必要なのかな、とも思いますが大型バイクの免許もあることを考慮すると失うには惜しいのです…）、三つ目は西本願寺での「殿試」の受験の為でした。

「殿試」というのは本願寺派における「学階」をいただくための試験なのですが、「学階」をいただくと毎夏、龍谷大学大宮校舎（西本願寺のすぐ隣）における「安居」に懸席（参加）することが出来るようになります。安居の歴史は古く、仏教全般で言えば釈尊の時代からありますが、当流では1640年の良如上人の代に講義が始まったとありますので、380年近い歴史がある伝統あるものであります。

安居では毎夏、三人の講師による浄土真宗、それから他宗の教えの講義、「安心論題（あんじんろんだい）」と呼ばれる浄土真宗の信心に関する論題から一論題、それから教義に関する論題から二論題の三論題を多数の僧侶が問答形式で理解を深めていく「会読（かいどく）」というものが行われています。

この安居に懸席されている僧侶の皆さんは「学階」を保持している僧侶の方々ですが、「学階」と一口で言っても「得業・助教・輔教・司教・勸学」の五段階があります。この中の「得業・助教・輔教」のいずれかをいただく為の試験が「殿試」であります。

「殿試」は出る問題が決まっています。というのも、さきほど名前が出た「安心論題」十七論題の中のどれか一つ、が「殿試」での試験問題となるのですが、実際には当日の朝までの論題が出るのかわかりませんので、これらの論題を全て暗記しなければいけません。一昔前までは暗記しなければいけない論題が百論題であったとか…その当時であったならば通暢（つうちょう、合格の意）したかどうか怪しいものです。その百論題から時代が経つに連れ重要性の薄れたもの等が除かれていき今の十七論題という形になりました。

私が受験した際は「三心一心」という論題でしたが、どの論題も四字の漢字で示されており、その論題があきらかにしようとしている内容、出典（出拠）、論題の言葉の意味（この場合「三心」とは何か、「一心」とは何か）、そしてどのようにこの論題をあきらかにしていくか、ということを書かねばなりません。その筆記試験の内容を元に口答試験で色々と質問されるのですが、これらの試験が行われるのが国宝西本願寺書院の「東狭屋（ひがしきや）の間」（写真）という普段は観光でしか立ち入れないような所ですので緊張感も余計に増します。しかし、実はこの「安心論題」を解説する『安心論題を学ぶ』という内藤知康和上の本を英訳するプロジェクトのメンバーであり、「三心一心」の英訳は私の担当で

あったので「三心一心」と朝に発表された時には内心ガッツポーズでした。

さて、先ほど「学階」に五段階あると言いましたが、「勸学・司教」は能化（のうけ）と言われ、「輔教・助教・得業」は所化（しょけ）といわれます。「化」という漢字は最近ですと「化ける」というような意味で使われることが多いですが、「おしえみちびく」という意味があります。「能・所」は「能」が能動態、「所」が受動態をあらわす時に使われますから「能化」は「おしえみちびく側」、「所化」は「おしえみちびかれる側」という意味で、「能化」の側の先生方を私達は敬意を込めて「和上（わじょう）」と呼ばせていただいています。

この和上方の中でも明治時代の和上さんに原口針水和上という方がおられました。この方が詠まれた詩が浄土真宗の法話などでもよく使われますので、シェアさせていただきます。

「われとなえ われきくなれど 南無阿弥陀 連れてゆくぞの親の呼び声」

この私の口をついて出てきている南無阿弥陀仏の称名念仏ではありますが、これは阿弥陀如来の「必ず救う、われにまかせよ」という呼び声であります。「救う」というのはこの苦悩に満ちた迷いの世界から、お浄土というさとりの世界に必ず生まれさせるということですから、「連れて行くぞ」という呼び声でもあります。自分の力ではこの迷いの世界を抜け出すのに役立つものを何一つつくり上げる事のできない私達ではありますが、阿弥陀如来はこのような私達を見捨てる事無く「必ず救う、われにまかせよ」と常に呼び続けておいでくださっています。私達はただただ「ありがとうございます、どうかお心のままにおすくいください」とその如来さまのお働きにおまかせしていくのみであります。



（写真：西本願寺書院、東狭屋の間）

文責・菅原祐軌

